

8 学校アクションプラン

令和7年度 魚津高等学校アクションプラン - 1 -		
重点項目	学習活動	
重点課題	生徒が主体的に参加できる授業への改善、家庭学習時間の充実	
現 状	<p>本校では、生徒一人ひとりの進路希望の実現に向け、授業改善と学習習慣の定着を重要課題とし継続的に取り組んでいる。しかし、授業を含め学習に対して受け身の生徒の割合が高いように思われる。近年、探究活動や協働的な学びの機会も増えつつある中で、Google Workspace を活用したフォームやスライド、ドキュメント等による双方向的・協働的な学びが徐々に浸透し始めている。今年度はDXハイスクール事業の採択を受け、さらにICT活用の幅が広がるとともに、貸与タブレットの個人所有化により、生徒が主体的に学習に関わる基盤整備が進みつつある。今後は、こうしたICT環境を生かし、生徒の学習意欲と対話的な学びの充実を一層図ることが求められている。</p>	
達成目標	<p>①ICTに関する校内研修とサポート体制の充実</p> <p>ア. 校内研修 (ICT・生成AI関連) に参加した教員の割合</p> <p>イ. Google Workspace (フォーム、スライド、ドキュメント等) を活用した授業実践について、教科内で事例共有を行った回数 (年間)</p>	<p>②生徒の学習自己管理能力の育成</p> <p>ア. 学習時間調査の結果をもとに、自身の学習状況を振り返り、学期に1回の目標設定を行った生徒の割合</p> <p>イ. 自身が設定した学習目標に対して、「ある程度達成できた」と回答した生徒の割合</p>
	<p>ア. : 70% イ. : 3回以上</p>	<p>ア. : 70% イ. : 70%</p>
方 策	<p>Google Workspace 活用の促進と実践の共有の醸成を図るため、各教科部会において月1回程度、授業実践の中での活用事例を持ち寄り、簡単に紹介・共有する場を設ける。形式は口頭・スライド・プリントなど自由とし、身近な実践から「真似できる」アイデアの蓄積を目指す。共有された事例はICT担当または各教科の代表が記録し、必要に応じて校内ポータルや研修資料として全体に展開する。</p>	<p>生徒が学習状況を自己評価し、目標設定を行うために、学期ごとに振り返りシートに入力し、学習実態調査の結果を元に自分の学習習慣を客観的に確認できるようにする。</p> <p>振り返りシートは、生徒が自分で目標設定を行い、その目標達成に向けた計画を立てる際のガイドラインとして使用する。教師は、面談等を通して振り返りの際に生徒が設定した目標の実現可能性についてフィードバックを行い、具体的な改善点を伝える。</p>
達成度	<p>ア. 校内研修 (ICT・生成AI関連) に参加した教員の割合</p> <p>6月実施 (58%)、11月実施 (50%)</p> <p>イ. Google Workspace (フォーム、スライド、ドキュメント等) を活用した授業実践について、教科内で事例共有を行った回数 (年間11回) 現在9回</p>	<p>ア. 学習時間調査の結果をもとに、自身の学習状況を振り返り、学期に1回の目標設定を行った生徒の割合 (73.4%)</p> <p>イ. 自身が設定した学習目標に対して、「ある程度達成できた」と回答した生徒の割合 (51.21%)</p>
具体的な取組状況	<p>ICTに関する校内研修およびGoogle Workspace活用促進を目的に、教科部会での事例共有やポータルサイト運用を進めてきた。校内研修への参加率は約50%であったが、欠席者や出張等で参加できなかった教職員に対しては資料共有を行い、内容の周知を図った。実践事例の集約・公開により情報共有は一定程度進展している。今後はICT活用自体を目的とせず、指導改善や業務効率化につながる活用を重視し、実践導入時の戸惑いや課題に寄り添った支援の在り方を検討していく。</p>	<p>生徒の学習自己管理能力の育成に向け、各学年の実態や方針に応じた方法で、学習状況の振り返りや目標設定に取り組んでいる。学習時間調査の結果や日常の学習状況をもとに、振り返りシートへの記入、記述による省察、面談等を通して、生徒が自らの学習習慣を見直し、次の学期に向けた目標を考える機会を設定した。形式は学年ごとに異なるものの、全校アンケートの結果から、多くの生徒が学習を振り返り、一定の手応えを感じながら主体的に学習に取り組んでいる様子がうかがえる。</p>

評価	B	B
学校関係者の意見	校内研修においては、業務多忙の中参加しにくいと思われるが引き続き研修を進めてもらいたい。学習時間の調査をもとに、生徒自身が学習状況を振り返り、学期に1度の目標設定を行っていた割合をみると生徒は真面目に取り組んでいたと思われる。面接等で先生方からアドバイスをしてもらい改善していけるようにしてほしい。	
次年度へ向けての課題	次年度に向けては、生徒の学習自己管理能力をより一層高めるため、目標設定から振り返りまでの支援を体系的に充実させる必要がある。今年度は学期に1回の目標設定を行った生徒は73.4%であった一方、「ある程度達成できた」と回答した割合は51.21%にとどまり、目標達成感や計画遂行の面で課題が残った。アンケート結果からは学習習慣や工夫を意識する生徒も多く、意欲の芽は見られるが、計画通りに進まない背景やつまずきを丁寧に把握することが求められる。今後は振り返りシートや面談等を通して自己調整を促すとともに、Google Workspace（フォーム、ドキュメント等）を活用した振り返り・共有の仕組みを整え、生徒が学習状況を客観的に捉え、目標を修正しながら主体的に学習を進められる環境づくりを進めていきたい。またICT活用についても、実践共有や校内サポート体制を強化し、授業改善と教育活動の充実につなげることが課題である。	

(評価基準 A：達成した B：ほぼ達成した C：現状のまま D：後退した)

令和7年度 魚津高等学校アクションプラン — 2 —

重点項目	学校生活
重点課題	スマートフォン、インターネット等の正しい利用について
現 状	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒は、ほぼ100%近い割合でスマートフォンを所有している。LINE、You Tube、Instagram、ゲームなどの利用率が高く、利用時間は一日2時間程度の生徒が多いが、3時間以上使用している生徒も一定数いる。また、顔が見えない人とやりとりが行えるSNSの利用から、犯罪につながったり、巻き込まれたりするという危険も高まっている。 ・学校では、スマートフォンの持ち込みは許可しているが、校地内での使用は禁止している。校内では電源を切って鞆や鍵付きロッカーに保管する規定になっているが、昼休みや放課後などに使用している生徒がおり、発見し次第その都度指導を行っている。 ・インターネット使用上の正しい知識や使用上のモラル、サイバー犯罪から身を守るための指導として、情報の授業や警察署などによる安全教室等を開催し、実践力を養うよう指導している。 ・昨年度のアンケート結果から、スマートフォンの利用が学習時間や睡眠時間の妨げになっていることを生徒達は自覚している。
達成目標	<p>①スマートフォンの利用が学習時間や睡眠時間の妨げになっていると答える生徒の割合を20%以下とする。</p> <p>②インターネット関連を安全に利用したと答える生徒の割合を90%以上とする。</p>
方 策	<ul style="list-style-type: none"> ・健全な高校生活を送るための基本的な生活習慣の確立を考えさせるとともに、SNS等の利用方法や危険性について指導し、自己と他者の安全確保のため、個人情報保護の概念を理解させる。 ・学習時間や睡眠時間を妨げない利用の仕方について、クラス目標や個人目標を考えさせ、自主的自律的な態度でスマホを利用する強い心構えを構築させる。 ・学期末にアンケートを実施し、自己評価と計画の修正を図り、意識の継続を図る。 ・PTA総会や各学期の保護者会等で、「スマホ家庭のルール」について呼びかけ、ルール設置を要請する。
達成度	<p>①スマートフォンの利用が学習時間や睡眠時間の妨げになっていると答える生徒の割合は、アンケートの結果、43%だった。目標の数値には届かず、今後の指導をどうするのか検討する必要がある。</p> <p>②インターネット関連を安全に利用したと答えた生徒は99%で目標としていた数値を上回った。</p>
具体的な取組状況	<ul style="list-style-type: none"> ・1学年(5月中旬)で、HRで生活委員が中心となってスマホやクラスのルール作りを行った。 ・8月に全校生徒へのスマホに関するアンケートを実施。11月には県教委作成のスマートフォン等の利用等に関する調査を実施した。 ・長期休業前にしおり等を通じてスマホ、SNS関連のトラブルに巻き込まれないよう注意喚起を行った。 ・学年集会では、各学年生徒指導担当の先生が注意喚起を行った。
評価	C
学校関係者の意見	<p>スマホの使用時間や2度目のアンケートで改善傾向がみられているのはよい。安全に利用したと答えた生徒は100%になるのが望ましい。高校生が不適切な動画をあげて問題になるケースが報道されている。本校でも対策を考えていくべきである。</p>
次年度へ向けての課題	<p>スマホをほとんどの生徒が所持している中、学習時間や睡眠時間の妨げにならないようにするには学校でどこまでできるのか検討していく必要がある。また、全国的にスマホをめぐる様々なトラブルが起きており、本校生徒が巻き込まれないように毎年何かしらの対策を考えていかなければならない。</p>

(評価基準 A: 達成した B: ほぼ達成した C: 現状のまま D: 後退した)

重点項目	進路支援	
重点課題	生徒一人一人が自己のあり方、生き方を考え、学習意欲を高める指導	
現 状	<ul style="list-style-type: none"> ・全般的に進学に対する意識は高いが、大学進学目的や将来のビジョンが明確でなく、そのために具体的な進路目標の設定が遅い生徒が見受けられる。 ・生徒自身が自己の能力・適性を深く考えて進路目標を設定しているとはいえない面があり、漠然とした進路目標のため、自主的・意欲的な学習に結びついていない生徒がいる。 ・9割以上の生徒が国公立大学に進学を希望している。 	
達成目標	① 進路指導支援全般と試験対策支援の満足度、充実度	② 国公立大学合格率 (国公立大学合格者数/国公立大学出願者数)
	卒業時の満足感、充実感を高める	合格率75%以上
方 策	<ul style="list-style-type: none"> ・生活指導を基本とし、自学自習の力を養成する。 ・3年間を見通した進路指導計画を作成し実施する。 ・学習状況の把握を目的とした教科担当者を交えた学年検討会を開き、生徒の現段階での志望校を確認し、共通意識を持って学年及び全教師集団による指導を行う。 ・「進路探訪」や「富山大学訪問」などを通して進路を考えさせる。 ・「進路講演会」、「先輩に学ぶ会」、「合格者に学ぶ会」など、外部からの進路情報提供を充実させ、意欲的に学習に取り組ませる。 ・面接指導を通して、生徒理解を深めるとともに信頼関係を構築し、早期に進路目標を設定させることで学習意欲を高め、学習習慣を確立させる。 	
達成度	どの行事もアンケート結果より概ね、将来の進路を考える上で、「参考」「とても参考になった」と回答した。	78.2%
具体的な取組状況	<ul style="list-style-type: none"> ・進路講演会 1学年(5月)は、自身の学習定着度や学習習慣を振り返る機会として、2学年(9月)は、大学受験の仕組みを知り、受験に向けての心構えや自らの進路をより具体的に考えるきっかけとして、3年(6月)は、受験体制に切り替える機会として実施した。また、11月には2学年の保護者に向けても進路講演会を行い、大学受験に向けての支援体制などを伝えた。 ・進路探訪(2学年)では、2泊3日の日程で、大学、企業、施設訪問を実施した。例年の大学生だけでなく、今年は本校同窓会からの協力も得て、本校卒の社会人からの講話も聞くことができ充実した研修となった。 ・1学年で、8月に富山大学訪問を実施し、希望する学部の講義を、実際に2種類受講した。文理選択など考える上でも役立つものとなった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学年検討会 第1回の3学年検討会を9月から7月に変更し、実施した。会で広く意見・助言を得たことで、担任がより説得力を持って保護者会を行うことができた。 ・難関大学を志望する生徒には、4月より国数英で個別指導を行い、過去問題を解かせた。 ・最難関大学を志望する生徒には、曜日で科目を固定し放課後演習を行わせた。また、対策委員会を設け、指導の進捗状況など科目担当者間の共通理解を図った。 ・進路目標の設定、学習習慣の確立に向けて、面接期間などを設定し、学級担任による個別面接指導を実施した。
評価	A	A
学校関係者の意見	進路支援については、多岐に渡る活動をやっているもので、このまま継続していきたい。	
次年度へ向けての課題	「進路探訪」や「進路講演会」などの行事について、同窓生にもっと協力をお願いしてもよいのではないかと。	

(評価基準 A:達成した B:ほぼ達成した C:現状のまま D:後退した)

重点項目	生徒の自主的・自律的な活動の充実	
重点課題	生徒主体の学校行事の運営	
	① 生徒主体の学校行事の運営	② 部活動の活性化
現 状	<ul style="list-style-type: none"> 学校行事の運営が、生徒の自主性や主体性につながるように、活動内容を工夫している。特に、体育大会、球技大会、魚高祭は実行委員や生徒会が中心となって主体的に活動している。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒は、学習と部活動を両立させようと努力している。
達成目標	<ul style="list-style-type: none"> 学校行事（特に、体育大会、球技大会、魚高祭を重視）に主体的に参加し協力したことに達成感を抱いた生徒の割合。 	<ul style="list-style-type: none"> 部活動に積極的に取り組んだ生徒の割合。
	80%以上	80%以上
方 策	<ul style="list-style-type: none"> 生徒が積極的に学校行事に参加できるように、生徒会等が主体となって、できる限り意見を聞いて活動内容を工夫する。 	<ul style="list-style-type: none"> 部活動に対する生徒の意識を高め、活動時間を有効に活用する工夫を促すことによって、部活動の活性化を図る。
達成度	※アンケート結果より ・学校行事に積極的に参加した生徒の割合 1年：95% 2年：95% 3年：94%	※アンケート結果より ・部活動に積極的に取り組んだ生徒の割合 1年：97% 2年：97% 3年：96%
具体的な取組状況	<ul style="list-style-type: none"> 球技大会は、生徒会が中心となって企画し、本校体育館、ピロティ、グラウンドで開催した。 体育大会は、3年体育大会実行委員会が中心となって競技や応援の方法を協議した。多くの生徒が活発に活動し、協力していた。 魚高祭については、魚高祭実行委員会が中心となり、クラスや部活動、委員会等の企画を調整しながら運営した。3年に一度の魚高祭ということで多くの生徒が積極的に楽しみ充実したと回答している。 ボランティア清掃については、生徒会が各部活動単位で参加を募集し、通学路の清掃等を実施した。前期・後期で約250名の生徒が参加した。 	<ul style="list-style-type: none"> 定期的に部長を招集し、活動内容や活動環境について考えさせる機会を設けた。また、課題解決に向けて各部内での情報共有を行わせた。 約9割の生徒が部活動に加入しており、他学年とのコミュニケーションをとることで、部活動の課題を話しあったり、練習面以外にも学校生活の悩みを相談しあったりしている。また、各部の顧問は進路相談や生活指導の役割も担っており、良好な関係を心がけている。 各大会に向けての壮行会を行い、生徒の志気を高めさせ、学校全体で周知し応援するようにした。 今年度の全国大会出場者はのべ16名、北信越（北陸・中部日本含む）大会出場者はのべ18名であった。（2月現在）
評価	A	A
学校関係者の意見	生徒の主体性を重視している点でどの行事も素晴らしい。このまま継続してほしい。	9割の生徒の加入率も素晴らしい。このまま継続してもらいたい。
次年度へ向けての課題	行事への積極性や達成度が学校生活の充実につながるので今後も生徒の主体性を大切にしていきたい。	学習と部活動の両立が充実したものとなるよう、今後も生徒を援助しながら教員も学び続ける必要がある。

(評価基準 A：達成した B：ほぼ達成した C：現状のまま D：後退した)

重点項目	その他	
重点課題	①読書習慣の確立に向けた図書委員会における支援活動の充実（本に興味を持たせるための工夫）	②生徒が抱える問題は様々であり、その多様性に 応じた柔軟なカウンセリングと支援を行う。
現 状	<ul style="list-style-type: none"> 生徒たちは、学習や部活動に多くの時間を割く必要があり、読書にまで手が回らない状態である。 本をたくさん読む生徒はそれほど多くはなく、読書習慣が身につけていない生徒や、全く本を読まない生徒が増加している。 2学期あたりから、3年生を中心に、大学入試の小論文・面接のための資料探しが増えるが、一時的な傾向にある。 1年間に全く本を読まない生徒は10%程度存在する。 家庭における読書に関する対話の促進・充実のために、保護者を対象とした図書館開放を、毎年数回実施している。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒や教員の要望に応じて、月に1度、スクールカウンセラー（以下、SC）が生徒にカウンセリングを行っている。
達成目標	<ul style="list-style-type: none"> 1、2学年で、年間1冊も本を読まない生徒を減少させる。（読まない生徒を5%程度にする） 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒の状況に応じて、SC、巡回指導員、スクールソーシャルワーカー（以下、SSW）を活用し生徒が抱える問題に柔軟に対応していく。
方 策	<ul style="list-style-type: none"> 1年次の図書館オリエンテーションで図書館利用を促す。また、2年次にも図書オリエンテーションを実施する。 生徒の興味・関心をとらえた企画、展示、広報活動を工夫する。また、校外図書選定等を実施し、できるだけ生徒の読みたい本をそろえる。 小論文対策のレファレンス機能の充実を図る。 教科の授業やHR、総合的な探究の時間等での閲覧室利用を促す。 教職員に対して図書資料に関する情報を発信する。また選書に関わってもらふ機会を設ける。 保護者の図書館利用を促し、家庭における読書活動の雰囲気醸成の一助とする。 	<ul style="list-style-type: none"> 日頃から教員間の情報共有を密にして、生徒の変化をできるだけ早く察知できるようにし、機敏に面接を行うなど、初期対応に留意する。 巡回指導員の活用を考える。 SSWの活用を考える。
達成度	調査の結果、全く本を読んでいない生徒は、令和8年1月15日時点で、12%強だった。	<ul style="list-style-type: none"> SCと巡回指導員を活用することで、個々の生徒が抱える問題について、柔軟に対応することができた。
具体的な 取組状況	<ul style="list-style-type: none"> HRの時間にクラスごとで図書館を利用してそれぞれ企画を実施してもらい、本のある空間に慣れ親しむ体験を心がけた。 学期ごとに、図書委員が、読書の苦手な生徒を対象として「読みやすく面白い本」を選定したり、夏休みに1・2年生で、クラスごとに図書委員が「クラス全員で読むこの一冊」を選定したりして、読書習慣をつける契機となるようにした。 例年の12月だけでなく、7月にも読書強化月間を設定し、ブラウジング等を行うことで、本を手取る機会を増やした。また、図書館イベント（ビブリオバトル、ALTによる世界文学紹介や音楽部コンサート）を行い、図書館に親しむ機会を設けた。 図書委員が、自分の感性を生かし、魚高生が読みやすい「図書館だより」（5回/年）や「図書館報」（2回/年）を作成した。 	<ul style="list-style-type: none"> 担任や養護教諭が、生徒の教育相談の要望を確認し、生徒の状況に応じて、カウンセラーを、SCか巡回指導員のどちらにするかを決定する。特別支援教育コーディネーターは、カウンセリングの日程等の調整を行った。
評価	C	A
学校関係者の意見	<ul style="list-style-type: none"> 様々な取り組みをしている点が評価できる。 今回の結果には、インターネットの影響が強く現れていると思われる。 	<ul style="list-style-type: none"> カウンセリングについては、生徒の性格や生活環境に応じた、きめの細かい対応が必要であり、巡回指導員などを積極的に活用すべきである。
次年度へ 向けての 課 題	<ul style="list-style-type: none"> 本校の生徒が「本を読む習慣」をつけたり、維持したりするための方策を、図書委員会で更に模索していく。 	<ul style="list-style-type: none"> 問題を抱える生徒の把握と、カウンセリングを通じた積極的な対応。 住みよい学校を目指した、環境整備と生徒の美化意識の向上。

(評価基準 A: 達成した B: ほぼ達成した C: 現状の、まま D: 後退した)